

「説唱芸能＜唱南游＞の語り」

廣 田 律 子

観音の信仰について浙江、福建または台湾、シンガポールで信仰されている陳夫人の事例を提示してみよう。陳夫人またの名を臨水夫人、順天聖母ともいうが、この女神は陳靖姑という女性が神になったといわれる。伝説によれば陳靖姑は、唐代、正月十四日に今の福建省福州に生まれ、出生に際して母が観音の指から流れた血を飲んで妊娠したとされる。閩山で法術を学び、その後、妖怪を退治し民を救う。大旱の折、雨請いを行うが、このとき墮胎し、それがもとで死ぬ。死後現われ、福建省古田県臨水郷の白蛇洞の蛇精を封じ、その地に廟（臨水宮）が建てられ祀られたとされる。観音の化身と考えられる。この陳靖姑の一生と所業を題材にした芸能は多種多様であるが、そのうち鼓詞、唱南游、唱竜船、評話の四種類の説唱芸能と人形劇を調査した。特に唱南游は除災を目的として行われ、追儺と関連すると思われるので取り上げる。

＜唱南游＞は、広く浙江省温州・永嘉地区一帯に行われる。この地域では各村ごとに陳靖姑を祀る太陰宮を見出せるといっても過言ではない。永嘉県の太陰宮では、三年ごとに中秋節前後の七日七晩をかけて、芸人によって陳靖姑の物語が歌われる。村中の病気などの災いを払う目的で村人達の主催で行われる。費用は合わせると一万元（調査時で約二十五万円）にも達する。太陰宮の陳靖姑の前には供物のほか、さつまいもを台に米粉で登場人物が作られて飾られる。また陳靖姑の修行の様子や妖怪退治を描いた紙の張り子が飾られる。一メートルを超える大きなものから十五センチほどの小さなものまで赤いろうそくが点され、なんとも幻想的な空間を演出する。

まず、陳靖姑の物語が語られる前に、祭祀を務める道士が陳靖姑に向かって拝礼をし、演者に向かって拝礼をし、その場を清め、観音などの神々を招く呪文を唱える。演者はこれをうけ、黄色の旗を振りながら、やはりこの場を清める文句から始め、神々の名を呼びながらお越し頂くように歌う。そして、健康で、福多く、長生きし、自然に恵まれ、作物が豊かに実り、子供を授かり、家畜も増える

等々の祝言を歌う。また、天上の菩薩や宿星や土地神について歌った後、陳靖姑の物語を歌い始める。語りは七言の講談調で、板切れを打ち鳴らしたり、ドラや太鼓を伴奏に入れる。陳靖姑の所業を歌うなかで、ご当地永嘉の地に到来する場面になると、道士の先導で皆で神輿を担ぎ出し、甌江の岸まで行き、線香をたき、陳靖姑を迎えて戻る。また陳靖姑が永嘉で人々に災いをなす白蛇を退治する場面では、紙製の蛇の張り子が剣によってずたずたに破られ、燃やされる。物語を歌い終わると、竹の枠に紙を張って作ったジャンクに先程の蛇の燃えかすを載せて、村中を巡って最後に甌江に流す。蛇はすべての災いを代表させたものといえる。これを自分達の領域から永く去らしめようというのである。紙でジャンクを模した船は、実際に今も付近の海で漁船として使われているが、竹を縦に割ったような横の隔壁構造を持つ箱型の、中国を代表する船である。船尾に、額に王の字を記した虎のような顔が描かれる。船首で大きく反り上がった舷側には、黒目が描かれている。これは実際の漁船でも魚のいる場所を見据える意味で、同様に黒目が付けられている。

この事例は、村の除災の儀礼が陳靖姑の語りと同時に進行で行われる点で、とても重要だといえる。陳靖姑の妖怪退治を語ることで、つまり過去の伝承の世界を今に生き返らせることで、現在の種々の災いも取り除いてしまえんと考えている。この基礎にあるのは、やはり陳靖姑・女神への人々の信仰心以外のなにものでもないだろう。現に女神の名が物語で歌われるたびにじっと聞き入る老女達は、手を合わせているのだ。

唱南游は、一つの観音信仰の形として、また除災を行う雛と機能と目的を同じくする祭りとして注目できる。浙江省には仮面を被った神による追雛行事は今のところ見出せないが、陳靖姑を祀る廟はどの村にもあり、それぞれの村の廟で、永嘉県の唱南游のような逐疫除病等を目的とする祭りが行われている。雛の神の行う祭りの重要な機能は、雛と称されてはいないものの、地方神によって受け継がれ、人々の願望に応じている。仏教の観音と結びつくと思われる民間の女神信仰のなかにも取り入れられていることから分かるように、雛の儀礼は中国の民間には欠くことのできない信仰儀礼である。信仰の対象とされる神は違っても、除災の儀礼は必ずとり行われている。今回演者趙連欽が行った〈唱南游〉の語りを、金崇柳が採取記録した「南游」（『陳靖姑地方神研究資料之二夫人詞』上海民俗

学会等編所収)をテキストとして、前半部分を翻訳して紹介する。

(歌う) 唐代の天保年間、天子さまは朝廷において、立派な文武の役人に補佐されて、国をよく治めた。

今語るのは、福州の候官県、鉄板橋の端にある陳の家のことだ。

老法師の名前は陳嘉義といい、号は上元という。

葛氏夫人と縁組を結び、息子二人とも法師となった。

兄の法師法通は十九才になり、弟の法師法青は十七才になった。

先祖から茅山の教えを伝えてきたが、後に閩山の許真君を信奉するようになった。

閩山の祖師の教えも同じで、兄法師は七才の頃に、夢の縁で閩山に行った。

最初に、竜風の占いを学び、過去と未来を知るようになった。

第一冊の法術の書を熟読すると、川や海の水を干して妖精を捉えることができる。

第二冊の法術の書を熟読すると、岩石や洞窟を切り開いて妖精を捉えることができる。

第三冊の法術の書を熟読すると、万物を育成する雨を降らせて百姓を救うことができる。

弟法師は話がはっきりできない上に、振舞もいささかおかしい。

しかし、不思議にも彼は心眼の持主で、鬼怪妖魔を見破ることができる。

うららかな春の季節がめぐってきたある日に、老法師は気晴らしのために郊外を散歩した。

西の二重の城門を出て、上下三つの村の名所を遊覧した。

上の村には、林姓の林百万が住み、下の村には王姓の王富豪が住んでいる。

中の村には、李姓の李金持が住み、上下三つの村でよく知られている。

(台詞) 聖人は南江殿から出た。この人は福州の候官県の鉄板橋の端にある陳姓の家に生まれた。

名前は陳嘉義といい、号は上元という。葛氏夫人と縁組を結び、法通、法青という二人の法師を育てた。

(歌う) 兄法師法通は十九才で、弟法師法青は十七才である。

先祖から茅山の教えを伝えてきたが、後に閭山の許真君を信奉するようになった。

法通は七才の頃に、夢の縁で閭山に行って、先に七算と六霊という占いの術を学んだ。

閭山で竜風の占いを習得して、過去と未来をよく知ることができる。

〔台詞〕 老法師は中の村の李相二とは、契りを結んだ義兄弟で、よい友達でもあった。老法師は中の村の李宅を訪ねた。李相二は立ち上がって迎えながら、「老法師、よくいらした。」と言うと、「相二兄さん、ご機嫌よう。」と老法師は答えた。「老法師、どうぞ、おかけなさい。」「相二兄さん、ご親切ありがとうございます、一緒にかけよう。」「老法師、今日お見えにならなかったら、わたしはお宅まで伺うつもりだった。」「どういうことですか。」「どういうことかという、あなたはいつもこの三つの村で仕事をしているのに、城内に住んでいるから、夜に行来するのは不便だろう。よいお天気なら我慢してもいいが、雨の日には困るだろう。城外へ引越しては如何だろうか。」「城外へ引越すには家があるだろうか。」「目下、わたし一軒の小さな家を持っている。忙しい時にはそこにとまるが、暇の時には空き家になるから、あなたはそこに住んでもよい。」「それなら、わたしは家に帰って家内に話してみよう。」「そうだ、奥さんに相談するのは当前だ。」「そのようにしよう」と話を交わした。

〔歌う〕 二人は話を止めてから別れ、老法師は家に帰って行く。

老夫人は立ち上がって迎え、老法師は自家の門に入った。

〔台詞〕 「老法師、お帰りなさい。」「ただいま。」老法師は李相二と相談したこと一部始終を夫人に話した。「今日、俺は李相二の家を訪ねた。相二兄さんは、俺が三つの村で仕事をするのに、城内に住んでいるから、夜に戻ると城門を開けてもらうのが不便だ。だから、城外に住む方がよいと俺に勧めた。彼の家は三つの部屋のある家をもっている。忙しい時には、彼はそこに泊るが、暇な時に空き家になる。ちょっと掃除すれば、俺たちをそこに住ませてもいいと言った。」「相二兄さんがそう考えているなら、わたしたちはそこへ引越した方がよいでしょう。」「と夫人は答えた。老法師は法通に「お前はいいと思うか。」と聞くと、「とてもいいことだ。」と答えた。「法青、お前の考えはどうだ。」「とーとーとてもいい、あの一の一人から俺たちをそこに住まわせてくれるなら、引越しーしー

しょう。」

(歌う) 陳の家の人たちは皆よく理解してから、人を遣わして李の家に知らせた。

李相二はそれを聞くと嬉しくなって、その家を掃除して陳の家の人たちを待った。

老法師は暦を見て日を選んで、吉日に引越しするように定めた。

吉日の日になると、陳の家はいろいろのことを整えて引越する。

陳の家の保護神、三つの紙の馬、三つの壇は集まって引越する。

観音さまには馬車一台、老夫人に馬車一台、老夫人は観音さまを捧げて引越する。非常に賑やかな光景だ。

大人たちには馬車一台、若者たちには馬車二台、父子、兄弟は引越する。

城内を出て李の家に行き、陳の家の老若そろって李の家に住むようになった。

陳の家は李の家に住んだことはさておき、この霊経を語ることは暫く止めて、後に語ることにしよう。

この人は福州の侯官県に生れ、川のほとりにある中の村の李宅の者である。

大金持の員外李文貴は、百万の財産の持主としてよく知られている。

新しく建てられた家屋には、前後に重なっている建物が三つあり、床板が敷かれた床はとてもきれいだ。

吉日に新しい家屋に引越して、親戚、隣人や同族のお祝いが続いた。

祝賀の宴が終わって客が帰って行き、夕方になった。

夜食を済した頃は、夜回りの始まる時刻になっても、町は賑やかでさわがしい。

夜が静まって二回めの夜回りの知らせが聞こえると、家族の老若とも寝室に行った。

夜が深まって三回めの夜回りの知らせが聞こえると、奥の方からラーラーと戸を開ける音がした。

使用人はその音がはっきり聞こえたので、この新しい家屋に妖怪が出たと言う。

仕方なく員外に申し上げて、李文貴はこのことの始末を聞いた。

再び引越して古い家に戻り、三棟の新しい家の扉を閉じた。

新しい家屋に妖怪が出たといううわさが立つと、侄の李相二はこのうわさを耳にした。

急いで叔父の家に来て、このことについて話し出した。

〔台詞〕 李相二は、「叔父さん、あなたはどのようにして新しい家屋に住まないで古い家に住むのか。」と聞くと、「君にかくさずに言うと、新築の家には夜中に鬼が出てたのだ、誰が恐れずに住もうか。俺はそれを売り払おうと思っている。」
「叔父さん、何をおっしゃっているのか。新築の家屋を売り払うと言い出したら、ほかの人はつまらぬことをいうだろう。男の不運だと、新築の家屋を売り払い、女が不運だと飼っている鶏を売るのだと言われるのだ。他の人のことはさておき、李文貴の家は安泰だというのに、風説が流布されたら困るだろう。お金を持っているから、家屋を建てるのは当前のことだが、出来上ってから二日半しか住まないで、三日間にもならないのに。」
「新しい家屋に妖怪が出て住めないのだ。」李相二はちょっとしてから、「めでたい吉日に工事を始めたのに、妖怪がどうして出るのだろうか。おや、妖怪が出るのは口先ばかりのささいなことだが、お金持ちの家に不吉なことが起きれば大変だ。」

李相二は叔父がそんな家に住みたくないのなら、それを老法師に紹介して住ませようと考えついた。彼は急いで自分の小さな家に戻って、「老法師、おめでとう、おめでとう。」と陳上元に言った。「家は無事で、仕事は順調で、これは日常のことだが、何とのめでたいことが俺の番に巡ってくるのだろうか。」「何と言ったら、あなたは家屋などと言ったことがあったね。家屋はあるが、ただ手数がかかるのだ。今手元にあるのだ。」「何だって。」「俺の叔父の新築の家さ。」「そうか、彼の家屋に、俺はそこに住むことができるのか。」「難しくはない。いくらかの銀で酒を飲ませてくれば、成功の見込みをもって話しあってみよう。」「そうか、君は俺を話し合いにつれて行ってくれ。」

〔歌う〕 李相二は老法師をつれて出かけた。一路止まらずに李宅についた。

門番が中門を開いて迎え、李相二と老法師は中に入っていく。

〔台詞〕 李相二はすぐ跪いて、「叔父さん、ご機嫌よう、お伺いします。」「お上がりなさい。」「叔父さん、ありがとう。」「おかけなさい。」「叔父さん、お言葉にあまえて。」

李文貴は陳上元を見て「この方はどなたですか。」「おお、あなたはお忘れに

なったでしょうね。この方は陳姓の老法師です。」「ほ、ほ、老法師、どうぞおかけ下さい。」「ありがとう。」「お茶とお菓子を出してくれ。」

李相二はすぐに聞出した。「叔父さん、新築の家屋に住んだばかりなのに、どうしてまた古い家に戻られましたか。」「君、そのことは言わなくていいよ。」「どうして、ちょっと話して下さい。」「思いがけないことだ。新築の家屋に引越したばかりで、夜中にラー　ラーと戸を開ける音がした。妖怪が出たから、そこに住んではいけないと思った。」「おや、新築の家屋に妖怪が出たとか、わたしは信じない。吉日に工事を始めたのに、どうして妖怪が出られようか。」「李相二はさらに「あなたは先ず鍵と門の札をわたしに持たせて、私は老法師を連れて新しい家に行ってみましょ。妖怪がいれば、老法師にそれを捉えてもらいましょう。」と言うと、「君、それはいいことだ。」「問題はない。わたしと老法師とは友達だから、あなたも同じでしょう。」と李相二は言った。

〔歌う〕　彼は鍵を受け取って、老法師をつれて立った。

新築の家に来て、すべての庭と部屋をくまなく見回った。

〔台詞〕　第一の庭から、第二の庭、第三の庭、母屋、次の家、また次の家、廊下、亭、楼閣、花園、柴小屋、牛小屋、便所などをすべて見回った。閉めるべき処を閉めておき、開けるべき処を開けておき、大門を出てから鍵をかけた。「老法師、こんな家に君を住まわせるなら、どうだ。」「と李相二は言う、「本当か。この家はとても素敵だ。大門に入ってからすぐの家だけに住まわせてもらえば、もう望外の喜びだ。」と老法師は答えた。「君はそんなに欲のない話をしたらだめだ。君は黙っていくれて、俺李相二が君のために話をしてみよう。」と李相二はさらに言った。

李相二は鍵を持って新しい家を出て、李宅の古い家に行くと叔父に会うと、彼は鍵と門の札を叔父に返して、「私も失礼します。」と言うと、「君、彼は見てから、どう言ったか。」「今話せません、話せません、そのうちゆっくり話しましょう。」

「侄さん、君はわざわざ彼を連れて見に行ったのに、彼のかわりに話すべきだ。」「そうか。」と李相二は言った。「叔父さんのことは、わたしのことと同じだ。そうね、話して上げよう。老法師は、『あなたの新しい家に大きな妖怪が945いて、妖怪の子孫は7000余りにもなる。妖怪は繁殖できるもので、一年に二回半の

お産で、新しい家に住みきれなくなったなら、あなたの古い家にも移って来るかもしれない。』と言ったのだ。」李相二はでたらめな話をして叔父を騙した。「あなたの新しい家は、焼き払っても売り払っても壊してもだめだ。売るなら、自分が恐がって住まないものは、誰も買わないのが当然のことだ。焼くなら、炎が天にまで燃える、隣家への防火が難しい。壊すなら、ばらばらになっても仕ようがない。あなたのために考えると、老法師に住まわせて、妖精を全部退治させるのがよい。彼が住めば、朝早くから、夜おそくまで、妖怪を一つ一つゆっくり退治するだろうからね。」「侄さん、君の考えでは、ただで彼を住まわせようというか。」「叔父さん、ただで住まわさせてはいけない。この家の妖怪が全部退治されてしまえば、従兄弟たちは、ただで老法師をこの家に住まわせたと言うかも知れない。あなたはそういうつまらない話を聞きたくないだろうからね。」

「侄さんの話にも道理がある。当時、俺の三重の家の敷地がもうできたが、後の東側の半分の敷地だけが志良と志一のものだった。彼らはそれを敷地として俺に贈ると言ったが、他の人に唆されて俺を訴えた。その訴訟で六、七百両の銀を費した。この家を作るだけでも六、七百両の銀を払った。匠人たちの三年の食事代、黄金や煉瓦などは勿論、白玉や牡蛎の灰なども数えに入れていない。君は老法師とちょっと相談してみて、千五百両にしてくれれば、彼をそこに住まわせよう。」

老法師はその話を聞くと、「実を言えば、俺は法師で、どうしてそんな大金が出せるだろうか。」と言った。「老法師、高い値段をふっかけられたら、うんと値切ってやるというものだ。老法師、かけ引きをしてみよう。酒を買うぐらいの一両の銀でごまかして移転してみてもいいじゃないか。」与李相二は勧めた。「君、本当に酒を買うぐらいの一両の銀の値段でかけ引きするなんて、それはだめだ。」

李相二はさらに叔父に「千五百両とおっしゃるのは多すぎるが、老法師が一両の銀と言うのも少なすぎだ。あなたは値段をうんと下げなければならない。老法師が千五百両もの銀を持っていれば、自分が木を切って新しい家を作る方がましだ、どうしてあなたの妖怪の出る家なんて買おうとするだろうか。」と言った。

「千五百両が多すぎるというのだね。もし妖の字がつかないなら、一万五千両の値もあるだろう。」「それはそうだ。あなたはなるべく値段を下げて、老法師

を住まわせるなら、妖怪が彼に退治された後でも、家はやはりあなたのものだ。」
「そうね、端数を削って、一千両で老法師を住ませよう。」と李文貴は言った。

李相二は老法師に、「叔父さんは一千両の銀に下げたが、君はいかがと思うか。」と聞くと、「俺の考えでは、五、六両の銀なら、引越して住んでもいいが。」と答えた。

「叔父さん、あなたが一千両とおっしゃるのは多過ぎで、老法師が五、六両と答えるのも少なすぎだ。叔父さん、あなたは大樹で樹皮も大きいから、お金のことをそんなに気にしなくてもいいじゃないか。妖怪さえ退治できればいいことだろう。値段をさらに下げて下さね。」「君の考えによって五百にしよう。」

李相二は、「老法師、叔父さんは五百と言ったが、君は。」と聞くと、「十五、六両なら住んでみよう。」と答えた。

相二は文貴に、「叔父さん、今日、わたしはお願いをする。たとえば、侄が叔父さんのお宅からの借用として、さらに大半を下げて、百五十両の銀にして下さい。老法師、君も値切らないで。」と言うと、「君の考えに任せよう」と老法師は言った。

李相二はさらに行った。「叔父さん。そのうち、老法師が家を買うために、酒を用意するはずだが、法師は一滴の水の氷ぐらいのものしか持っていないし、酒を用意してもあなたの気に入らないでしょう。私の考えでは、お宅の酒のかめが大きく、酒の味も濃いから、やはりあなたが一席の酒を設ける方がましだ。第一、この侄にお宅の酒を味わせ、第二、家の契約書を書くために。」

(歌う) 相二は心を尽くして陳の家を助け、李宅は一席の酒を設けて買い手を招待する。

酒一杯を飲んでから、口をきかず、酒二杯を飲んでから、気分が和やかになる。

酒三杯飲んでから、大切なことを持ち出し、李相二はゆっくり話し出す。

(台詞) 「叔父さん、買い手は売買の契約書を作って、その期日に二本の線を書いておくように願っている。」「誰に書いてもらおうか。」と李文貴は言うのと、「ご心配なさらないで、叔父さんのことだから、侄が書くのはあたり前だ。」

(歌う) 文房具を持ってきて、相二は卓につく。

さらさらと文章を書き、家の売買の契約書一枚ができた。

悪賢い李相二は、銀の数字を袖で擦った。

員外が書名をした後に、やっと叔父にこの契約書の文字を見せる。

(台詞) 「君が書いたものだから、叔父は君に頼って心配しないんだ。」

「老法師、君も見てごらん。」と李相二は言うと、「君は員外に信頼されている以上、俺陳上元も君に頼らないでおられようか。」と。

「ほら、よし、お二人ともわたしを信頼するなら、何ごともうまくできないはずはないだろうね。今、読んで聞かせて上げよう。」

家屋を売る契約書を作る人李文貴は、新築の前後に重なっている三棟の家及び庭がある。板を敷いた床、彫刻した梁、絵を描いた棟木。家は十三都三里三保、臨水中村にある。家が北側に建て南向きになっている。右は川の道まで、左側は水田、前は通り、後は小路。前後に重なっている家は三棟、軒のある正面の室が二つ、両側に回廊がある。上には瓦で作られた屋根、木の板の天井、扉、窓、壁、下には石灰で作られた家の土台、前には大門まで、井戸や道路に通じ、内には亭や楼閣、美しい花園、薪小屋、牛小屋、便所などを含んでいる。李文貴はお金が入用のために、自らこの家売る。侄李相二は中間に立って、銀五百両で陳宅に売る契約書を作る。陳宅がこの家を自分の財産として管理することは、李姓と関係がない。契約書がはっきり書かれてあり、銀も全部払われ、今後たがうことができない。これは両方とも同意したことで、どちらも後悔して改めることができない。この契約書を書いて証拠とする。

李文貴はそれを聞いてから聞き返す「侄さん、君は書き間違った。」「おや、書き間違ったか、裂いてしまおうか。」「慌てないで、君はどうして俺がお金が入用と書いたのか。」「叔父さん、契約書にはそう書くべきだ。」「また一句ある。君は俺に百五十両と言ったのに、あの契約書にはどうして五百と書いたのか。」

「おや、この句は本当に書き間違った。裂いてはいけない。家の契約書は一回しか書くことができない。この句のことならかまわない。今後わたしは保証できるし、わたしの書いたものだから、かまわないんだ」と李相二は契約書のことをこんなにごまかした。

(歌う) 彼は叔父を助けなくて、友達に助力し、心を尽くして陳の家をかばった。

(台詞) 老法師は手続きを済ませてから、家に帰ると、兄法師、弟法師に聞く。

「よいことか、どうか。」と。「とてもすばらしい」と法通は言い、「お父さん、立派な広間に住一す一すんなら、なんといい。」と法青は言った。

(歌う) 一家の老若とも喜んで、暦で吉日を選ぶ。

陳宅の保護神、紙の馬三匹、三つの壇は集まって引越先に行く。

百事に吉という日に、陳宅は手配して引越先に行く。

観音大士の馬車一台、老夫人の馬車一台、老夫人は観音菩薩を抱いて引越し先に行く。

大人の馬車一台、若者たちの馬車一台、父子兄弟は引越し先に行く。

陳宅の若者は引越し先に行き、親戚、隣人、同族の人たちは、お祝いを述べる。

祝いの酒席が終わると、客は各々帰って行き、老法師はゆっくり話しだす。

(台詞) 「今、我々は立派な家に住むようになった。些細な法事のために呼ばれることがあるなら、行かないことにしよう。」「お父さんの言うことはごもともだ。」と法通は言い、「狸を一つ一つつかまえるくらいの法事なら、当然ご免だ。」と法青が言うと、「お前のような奴は口をきくと、ろくな言葉がないな。」と老法師は叱った。

(歌う) 陳宅の若者が話しをしていると、もう夕方になる。

夜食を済ますと、夜回りの始まる時刻になり、街頭は賑やかだ。

鼓樓からの二回目の夜の時刻の知らせが聞こえると、一家の老幼は寢室に行く。

夜が静まって、鼓樓からの三回目の夜の時刻の知らせが聞こえると、裏の方からラーラーラという戸を開ける音がする。

老法師はこれをはっきり聞くと、思いめぐらして推測する。

(台詞) おや、戸を開ける音がして、兄弟二人は出て来たのか。「法通、お前は屋内にいて、どうして弟が出て来たのか。」と老法師は叫んだ。さらに「法青、法青。」と呼んだ。「夜中なのに、人を殴一な一なぐり殺したかのように、なんでこんなに叫ぶのか。」と法青は言うと、「お前は部屋の中にいるのか、誰か戸を開けていた。」さらに「法青、法青、お前は兄と一緒に起きて、何か音がしているのを見てこい。」と言った。

(歌う) 兄弟二人は急いで起きて、灯をつけて扉を開いた。

(台詞) 弟法師は神眼でちょっと照らすと、「鬼がいーいる、鬼がいる。」「どんな鬼。」「黄い鬼がいーるいる。白い鬼がいーるいる。」

(歌う) ぴかぴかする三尺の剣を手提げて、黄と、白の二人の妖怪に迫った。

早く逃げよう、早く逃げたら助かるが、でないと、命が危ういぞ。

この生死にかかわる地を離れて、海を渡って行こう。身を翻してこの危ういところを飛びだす。

天の門を打ちこわして、きれいな鳳凰が飛んで行き、金の鍵をねじ切って籠が飛びだす。

鯉が金の鉤を抜けて、いっさいかまわず急いで逃げる。

前の庁堂や後の壇まで追いつめるなり、妖怪が土に伏して姿を変じた。

(台詞) 弟法師は追いかけて来て、神剣で地面を切って、「ねーねーねじふせてやるぞ。」と言ったら、黄と白の金、銀の神がもう逃げられないと分って、姿をあらわした。弟法師ははっきりとその姿を見とった。「いー祝いを申す。金があーあーあり、銀があーあり、やー役に立つ金、やー役に立つ銀、五百両の金、五百両の銀。」

兄弟二人はお父さんに知らせて、「新しく移転し、新しく栄える。」と老法師は言った。黄金、白銀千両を得たので、外の広間に祖師の壇を立て、師に祭りを捧げる法事をする。大法師は神の籠を担ぎ出し、法器を取り出す。

(歌う) 外の広間に祖師の壇を立て、壇を立てて法事を行い始める。

頭に神雲や神額をつけ、身に法衣や神袴を着る。

足元に卦という占いの用具をおき、手印わ結び、口に閻山の玄妙な法術の書を読む。

左手に鈴を持ち、右手に竜角を持ち、まがった竜角が霊壇でひびく。

竜角の音が速山と茅山にひびきわたり、竜角が一回吹かれて長くひびく。

閻山、茅山、竜虎山、神兵神将が三つの神壇に集まる。

雷の兵、地の将が徳勝壇に、雷のような太鼓や竜角が迎香壇にある。

家の保護神、紙の馬三匹、雲三切、銭三十、三壇の神が徳勝壇に集まる。

(観客たちは香を持って礼拝する。)

(台詞) 老法師は外の広間に端座している。国が太平で、神さまの気分がよい。役人が清廉で、民衆は自ら安らかになる。妻が賢く、夫婦は喜ぶ。子が孝行で、父の心はゆったりする。

(歌う) 陳宅は目下成金となり、自分の家で銀の神を祀る。

老法師が外の広間に坐っていると、上村から生年月日を書いた赤い書状が送

られてきた。

(台詞) 「老法師。」「君は誰ですか。」「わたしは上村の林員外の命を奉じて、生年月日を書いた書状を大法師に送って来た。」「本当か。彼は立派な家の主人で、俺は道教の信者だ。どうして彼らに釣合おうか。」「そうおっしゃらないで、人間は情義に頼るもので、皇太子さまの縁組もお姫さまに限らないだろう。」「そうかね。俺は祖師から食べさせてもらう者で、祖師に頼るものだから、祖師に伺ってみよう。」

(歌う) 老法師は立ち上がって、お香を焚き、ろうそくをつけて祖師を拝む。

相手の人柄がよく、縁組もふさわしい、神様に伺い、おみくじをひいて、縁組が思い通りにいく。

老法師は喜んで、人を遣わして林の家知らせる。

両方の老若とも喜んで、暦で吉日を選ぶ。

めでたい吉日になると、陳宅は婚約のために準備する。

金の札、銀の札、四つそろって、結納としての金や銀が盆にのせられている。色彩緞子は言うまでもなく、鸞と鳳の模様のついた婚約書があかあかと輝く。桂圓、棗、栗など干した果物がそろえられ、ドラや、太鼓を鳴らして林の家に送る。

結納の品を拝受したという詩を書いて、それを陳宅に送り返した。

陳宅の若者は喜び、光陰は矢の如し。

少年と少女は大人になり、陳宅は日を選んで花嫁を迎えに行く。

めでたい吉日が来ると、両方の家とも掃除をし、赤い提灯を掲げる。

地面まで垂れている色彩の布や五色の幕、赤い絨毯が外の広間に敷かれている。

五世代までも栄えるという祝詞が左右に分ち、琴瑟相和し、黄金の飾りがつけられている。

新婚の部屋が整って、対句が左右に分っている。

左の方は、天上の嫦娥は玉の蝶を飛ばしとあり、右の方は、世間のお嬢さんは藍橋で立派な方に会うとある。

朝と夕方に相応しい音楽が奏でられ、花嫁を迎える花かごが林宅につく。

爆竹を鳴らして花かごを家の中に入らせ、花かごが外の広間の前で止って花嫁を待つ。

女中はお湯を温めて階上へ送り、花嫁に体を清めさせてから、身ごしらえをして上げる。

内壇の女神さまに紙の馬一匹、七星女神さまは花嫁の世話をする。

頭にかぶった赤い布が七尺、竜の模様を刺しゅうした真赤な着物に長い袴。足に緑の靴、赤いズボン、おしどりの絹の紐が左右に垂れている。

お嬢さんは女中に伴われて階上から降りて、目上の者に礼拝してから花かごに乗る。

爆竹をどめどなく鳴らして見送り、花嫁を迎える花かごが出立して行く。

林宅は幸運を祈りつつ戸を閉め、花かごが威風堂々として道を進んでいく。

歌の声や玉の笛の音がひびきながら南へ、一人の花嫁は四人に担がれる。

花で飾った陳宅に帰って、爆竹の音が賑やかにひびいて花かごが門に入ってくる。

下男がお湯を温めて法師の部屋に送り、兄法師は浴して花婿の身なりをする。

花かごの前に来て挨拶をし、かごを出た花嫁と神さまを拝む。

一生涯の伴侶として新婚の部屋に入り、酒の杯を交換する。

閑人が皆退いて、戸が閉められ、花嫁の頭にかぶった赤い布が取りはずされる。

『夫人伝』を小説のように語ってはならず、むだ話をその中に入れてはならない。

むだ話を『夫人伝』に入れば、天上の法律を犯して、洗い清めることができない。

瞬間に夜が明け、男は衣冠を整え、女はお化粧をする。

部屋の扉を開けると、お祝いの言葉が聞え、お祝いを述べる者は部屋に入ってくる。

花婿は外の広間で客を接待し、七日間の酒宴が終ると客が帰って行く。

七日間の酒宴が終ってから、八日目に始末をつけ、玉の瓶や皿や箸などを食器戸棚の中にしまう。

老法師は外の広間に座り、生年月日を書いた赤い紙が下村から送られて来る。

(台詞) 「老法師、いらっしゃいますか。」「外の人は誰ですか。」「私は下村の王員外の命を奉じて、弟法師のために生年月日を書いた赤紙をお宅に届けに来た。」「本当か。彼は役人で、俺は道教の者だ。どうして彼らに釣合おうか。」

「縁組ということは情義だけを重じ、地位などを重じない。太子さまは必ずお姫さまと縁組をするものでもないだろう。」「そうかね。俺は祖師から食べさせてもらう者で、祖師に頼る者だから、ちょっと祖師に伺ってみよう。」

(歌う) 老法師は立ち上がって、お香を焚き、ろうそくをつけて祖師を拝む。

相手の人柄はよく、縁組もふさわしい。神さまに伺い、おみくじをひいて、縁組が思いどおりにゆく。

老法師は喜んで、人を遣わして王の家に知らせる。

両方の老若とも喜んで、暦で吉日を選ぶ

めでたい吉日になると、陳宅は婚約のために準備する。

金の札、銀の札、四つそろって、結納としての金や銀が盆にのせられている。

色彩の緞子は言うまでもなく、鸞と鳳の模様のついた婚約書があかあかと輝く。

桂圓、棗、栗など干した果物がそろえられて、ドラや太鼓を鳴らして王の家に送る。

結納の品を拝受したという詩を書いて、それを陳宅に送り返した。

結納の老若は喜び、光陰は矢の如し。

少年と少女は大人となり、陳宅は日を選んで花嫁を迎えに行く。

めでたい吉日が来ると、両方の家とも掃除をし、赤い提灯を掲げる。

地面まで垂れている色彩の布や五色の幕、赤い絨毯が外の広間に敷かれている。

五世代までも栄えるという祝詞が左右に分ち、鸞と鳳がともに鳴く絵が扉に貼られている。

新婚お部屋が整って、対句が左右に分っている。

左の方は、鳳凰が翅を伸ばし、草が茂げり、科挙及第の喜びとあり、右の方は、蓮の花が咲いて地面一杯赤赤としているとある。

『夫人伝』を小説のように語ってはならず、むだ話をその中に入れてはならない。

むだ話を『夫人伝』に入れれば、天上の法律を犯して、洗い清めることができない。

瞬く間に夜があけ、男は衣冠を整え、女はお化粧をする。

部屋の扉を開けると、お祝いの言葉が聞え、お祝いを述べる者は部屋に入ってきて来る。

花婿は外の広間で客を接待し、七日間の酒宴が終ってから客が帰っていく。

七日間の酒宴が終って、八日目に始末をつけ、玉の瓶や皿や箸などを食器戸棚の中にしまう。

老法師は外の広間に座り、老夫人はゆっくり話し出す。

〔台詞〕 老法師は目下李宅の家に住み、林、王の二人の嫁が迎えられてきた。読経して仏を拜むために、部屋を整えたい。

「林、王の嫁がこの家に来てから、この家はいくらか狭くなったようで、読経に都合がよくない。経堂を立てて、落ち着いた部屋で読経して仏を拜みたい。いかがでしょうか。」

「お母さん、今言ったことはもっともだ。」と老法師は答えた。老法師は衣冠を整えて家を出かけた。

日を選ぶ店に来ると、店の主人は老法師の知り合いで、「老法師、あなたは敵店にいらして、何のご用ですか。」と聞いた。「たいしたことでもない。家内が読経し、仏を拜むために 経堂を立てたいから、日を選んで下さい。」

「老法師、どういう方向か。」「北側に建てて南向きになるのだ。」

癸丁に丑未、彼は暦を待って吉日を選ぶ。「老法師、期日があるが、時刻がない。」「それはどうでしょうか。」「『采』を捉えなければならない。その日の黄昏に、ちょっとおそく、大工さんのために一席の酒宴を設けなさい。あなた自身は東南の方に立って待つ。南の方から一筋の白雲がただよってくれば、その時刻に乗じて、家の柱を立てたら、立派な賢人がお宅に生まれるよ。」「本当か、俺の家は道教の信者だが、どんな立派な賢人が俺の家に生れるのかな。」「あなたがその『采』をしっかりと捉えたら、必ず立派な賢人が生れてくるよ。」「そうか。」「このお礼をあげよう。」

日を選ぶ先生は、彼がけちだと知っているから、「あなたのお金はもらわない、あなたの銀を取れば人間ではない。」と急いで誓いを立てた。彼が言い終わらないうちに、老法師は、「どうしようか、どうしようか」と急いで言いながら、お礼の小包を取り返してそこを離れた。

老法師は吉日を選ぶ店を出て家に帰った。老夫人は彼を迎えて部屋に入れる。「吉日が選ばれた。法通に木を切らせ、大工さんを頼ませよう。」

〔歌う〕 兄法師を遣わして、川辺から抜いた木を家に持って帰る。

頼まれた大工さんは、地突きをしたり、木材を切ったりして手配する。

長い木材や短い木材、木材をよく組み合わせておく。

めでたい吉日がくると、夕方に酒宴を設けて師匠を招待する。

老法師は一人で東南の方に立って、二回めの夜の時刻の知らせが過ぎて、三回目となった。

(台詞) 南の方から一筋の白雲がただよって来て、老法師はこれを見るなり、「時刻が来た。家屋の骨組を立てよう。」と呼び掛けた。

(歌う) 一言の言付けによって仏閣が建てられ、斧やのみの音がチリンチリンとひびく。

三室の仏閣が高く聳え、東西南北の見はらしがとてもよい。

四面に彫刻を施した窓、屋根の瓦もよく整った。

階段が朱の漆で塗られ、卍字の手すりが全部金色で絵かれた。

仏閣の工事が順調に進んで、銀や錫などが使われたことは詳しく話さない。

(台詞) 老法師は長男の嫁に、「林嫁さん、仏閣が建てられた。仏閣、仏閣、何と名前をつけようかね。何楼と名づけたらよからう。」と言うと、「お父さん、わたしたちは南の方の雲を『采』として捉えて仏閣を建てたので、南雲楼と名づけたら如何でしょう。」と林嫁は答えた。「南雲楼とはよし、南雲楼とはよし。」と老法師は言った。

(歌う) 林嫁は仏閣を名づけて、南雲楼という。

老夫人はこれを聞いて喜び、始めて南雲様に上がる。

家の保護神、紙の馬三匹、紙の鶴三羽、銭三十、三壇が集まって南雲に上がる。

内壇大士に紙の馬一匹、女神に紙の馬一匹、老夫人は観音さまを抱いて南雲に上がる。

内壇の大衆に紙の馬一匹、小衆に紙の馬二匹、父子兄弟は南雲に上がる。

階段が華やかに絵かれ、卍字の手すりが全部金色で塗られた。

すべての垂木の先に鏡が嵌められ、太陽に照らされてびかびかする。

南雲楼の上に上がって、左右の対句が目に残まる。対句は、

雷の印が黄金に鎖され、お経が尊ばれて世の中が和かになる。

上に三教の祖師の香机が置かれ、左右の対句が目に残まる。対句は、

三教の祖師が上座に坐り、山川の五雷が霊壇を守る。

家の保護神に紙の馬三匹、女神に紙の馬一匹、老夫人は祖師を拜む。

雷霆大士観音仏、左右の対句が目に留まる。対句は、
西天の竹の葉が千年までも緑、南海の蓮の花が至って香しい。
内壇大士に紙の馬一匹、女神に紙の馬一匹、老夫人は観音さまを拝む。
老夫人は階上にいて、仏を拜んだり、読経したりする。

南雲楼上のことはさておき、この『夫人伝』の話をちょっとかえ、時を戻して語ろう。

七宝霊山の雷音寺で、二月十九日に観音さまは蟠桃大会を催す。

瑤池を多に開けて、お誕生日のお祝いに来る八洞の神仙を迎える。

(台詞) もてなすために、仙茶があり、仙林があり、仙果もある。

観音さまは、「どの大仙の法術がもっとも優れ、もっとも神妙なのか。」と言うと、呂純陽は洛陽で銀を投げて観音さまを汚したことがある。今度観音さまが個人的恨みを公の事を利用してはらすのではないかと心配しているので、先に上奏する。「仏母、法術と言えば、私の法術がかなりよいのだ。」「君の法術はどういうものか。」「私は鉄で作った網杓子があるから、海の水を汲み干すことができる。」「おー、よし、よし。」「

鉄の杖をつく老者は、「仏母、私は鉄で作った鉄の杖を持っているから、海の岩を引き抜いて天井に移すことができる。」と言うと、「よし、よし。」と仏母は言った。

四大金剛は、「われわれ四人の兄弟の法も劣らない。」と言うと、「君たちの法はどういうものか。」と聞かれた。「海や山を天上に挙げておくことができる。」「よし、よし。」と仏母は言った。

「仏母、法のことを申せば、われわれ十八人の兄弟も劣らない。」と十八人の羅漢は上奏すると、「君たちの法はどういうものか。」と聞かれた。「われわれ十八人の兄弟は各々一つの靴を脱いで、海の水を全部汲みはせる。」「よし、よし。君たちは自分の法力がそんなに高いと言ったね。他のことはさておき、天を支えているこの白玉の柱を今の位置から三分ほど移せば、それは本当に法が高いと言えるのよ。」と仏母は言った。「天を支えているどの柱ですか。」「その一本の柱だ。」「その柱か、それを背うことができる。三十回背ってから仏母さまにお渡し申すのも難しくない。」「みなさん、ほらを吹くな。」「仏母さま、ごらんなさい、わたしたちの身丈はこんなに大きいから、この一本の天の柱ぐらいた

いしたことはない。」「君たちの身丈は本当に立派なものだ。」「四大金剛は麻の家の者で、紂王の門前の四人の上将だった。後に四大金剛となって、力がとても強いのだ。」「三十回背ってみる必要はない。ただ三分ほどもとの位置から移せば、それは本当に法力がすぐれていると言えよう。」と四大金剛は仏母と言葉を交わした。

四大金剛の一人は柱のところに行って引き出そうとしたが、ちっとも動かせない。三番目と四番目の兄弟は一緒に行って、やろう、やろうと言いながら引いてみたが、少しも動かせない。

十八人の羅漢の一人は先に行って引いてみたが、動かせなかった。続けて三人も、四人も一緒に行って引いても動かせなかった。

「みなさんは各各自分の法がすばらしいと言ったね。わたしは一本の指で弾けば、それを三分ほどもとの位置から離すことができる。」と仏母は言う、
「わたしたち四人兄弟はあなたの一本の指にも及ばないでしょうか。」と四大金剛は言返した。「わたしはさらにそれをもとの位置に戻すことができる。」と仏母は言うなり、「あなたは指でそれを三分ほど離して、さらにもとの位置に戻すことができれば、わたしたち四人兄弟は、あなたのために山門を守って上げましょう。」と四大金剛は言い、「仏母さまが指でその玉の柱を三分ほど離してから、さらにもとの位置に戻すことができれば、わたしたち十八人の兄弟は、あなたのために両側の廊下を守って上げましょう。」と十八人の羅漢は言った。

仏母が天を指す指で、天を支えている白玉の柱の上をちょっと弾くなり、それを三分ほど離れた。もう一度弾くと、もとの位置に戻した。

（歌う） 四大金剛が山門を守っていると、仙人たちはその有りさまを見て、びっくりして呆然とするばかりだ。

金剛は大きいけれども、山門の外に立って、若い観音は殿堂の正面に坐っている。

羅漢はその有りさまを見るや、みずから両側の廊下を守りたいと言いだす。

内壇に羅漢十八人、十八人の羅漢は西側の廊下に分かれている。

韋駄菩薩は総管理人となり、弥勒菩薩はにこにこしている。

（台詞） 「人間は勝負をかけることが好きだが、負けたら気の毒ね。」と香山
仏母は言った。仏は指で天を支えている白玉の柱を弾いて、三分ほど離れたため、

指先が充血してはれて痛み出した。そして、金の針、金の皿を取り出し、指先を突き刺して、仏の血を金の皿に垂した。わたしは千里眼、順風耳を三天門へ遣わして、俗世のことをよく調べ、男の子が生れる家に李貴を送り、女の子が生れる家に、仏の血を送って妊娠させるようにしよう、と香山仏母は思った。

〔歌う〕 香山仏母は諭旨を下し、千里眼、順風耳を三天門の下へ遣わして実情を調べさせる。福州侯官県に住んでいる黄、陳の二姓の家の者がよく修行することを調べて明らかにした。

黄宅には男の子が生れ、陳宅には女の子が生れる、と大悲観世音に上奏した。

香山仏母は高元帥を遣わして、子を抱く張山を俗世の家に送る。

この人は福州侯官県に生れ、城内に住んでいる黄宅の者である。

この四品の役人は老齢で職を辞し、名前が黄元中という。

文姓の夫人も爵損を受けたが、男の子が授けられなかった。

仁徳を修行する夫婦は、貧乏人を心にかけてよく修行する。

橋が倒れたり、道が陥没したすることがあれば、それを修復し、仏像が古ぼけると金で塗りかえさせれる。

この年寄に長年の借金を返せば、若者は本金だけを返せばよい。

ある日、三回めの夜の時刻を知らせる頃に、夫人は悪夢のために叫び出した。

〔台詞〕 「よく眠っているのに、何の悪夢で叫び出したのか。」と黄大人は聞いた。「わたしは夢中で三天門が大きく開いて、竜虎が地に下りたのを見た。」と夫人は答えた。「おや、夫人、妊娠できるに違いない。男の子が授けられるはずだ。女の子じゃない。男の子が授けられたら、文淹と名づけようね。」

家の保護神に紙の馬一匹を供え、文淹坊ちゃんのために神に捧げる。

二人のお年寄りは嬉しくなり、夫人は部屋にこもって養生する。

この『夫人伝』で黄宅のことはさておき、話かわって陳宅のことを語ろう。

老夫人は南雲楼で読経しているうちに、喉が渇いて声がかれる。

〔台詞〕 階下に降りてお茶で渴をいやすはずだが、お経はまだ一段落が終らないので、降りては不便だ。丁度外に雨が降っているから、銅の鉢を持って少し雨水を受け入れて渴をいやそう、と老夫人は思った。老夫人は窓を開けて、取り出した銅の鉢で雨水を受け入れる。

〔歌う〕 一滴の赤い雨が銅の鉢に落ちて、極楽世界の仏の弟子がお腹に入った。

一夜が過ぎて翌朝になり、林、王二人の姉妹は南雲楼に上がった。

お茶を机の上置いて、姑御に挨拶する。

姑御は、何のことで、少し心配そうにしていらっしゃるのか。

お前たちは聞かないなら、私は言わないが、どういうことかと聞かれたから、率直に話そう。

私は南雲楼で読経していたところ、どこからか変なものがわたしの身についてた。

姑御、おめでとう、妊娠されたこと、おめでとう、姑御は妊娠なさった

お前たちはわたしを笑わないで、姑として何の面目があって他人に会おうか。

(台詞) 「姑御、家に二人の法師がいるが、三番目の妹さんはまだいない。三番目の妹がいればおめでたい三人そろうはずだ。姑御、姑御。」

(歌う) 読経なさるには、南雲楼は不便になったので、階下に降りてお父さまに知らせましょうね。

(台詞) 「姑御、家に二人の法師がいるが、三番目の妹さんはまだいない。三番目の妹がいれば、おめでたい三人になるはずだ。姑御、姑御。」

(歌う) 読経なさるには、南雲楼が不便になったので、階下に降りてお父さまに知らせましょうね。

お前たちの言うことは道理がある。わたしは一緒に南雲楼から降りて行こう。

家の保護神に紙の馬三匹を供え、姑と嫁は南雲楼から下りて来る。

老法師に知らせてから、老夫人は部屋に帰って養生する。

老法師はすべての廟に行ってお願かけをし、お香を点し、ロウソクをつけて神霊を拜む。

光陰は矢の如く、水の流れの如し、月日のたつのは俣が動くように、風が雲を吹くように速い。

爆竹の音の中で一年は終り、春風が暖かさをもたらして、誉蘇酒を飲む。

輝かしい朝日が人家の軒に射し、どの家も桃の木の板に絵いた門神の像を新しいのに取替える。

冬の終りが過ぎて早春となり、正月の一日は賑やかだ。

一日、二日から三日まで、香炉の香が尽き、水時計の音も弱くなった。

四日が過ぎて、五日となり、五日に竜の紋様のついた衣を干す。

新年も、旧年と同様にめでたく、家ごとに新春を賑やかに祝う。

正月の八日は長い八日と言い、廟に入り、香を点じて神さまを拝む。

九日、十日、十一、十二日、十三日から元宵の灯籠をかけておく。

十三日の夜が過ぎて、十四日となり、極楽世界の仏さまの弟子は俗世の家に生まれる。

四つの山の聖人が迎えに来、橋に逢えば、橋の神が女神を迎える。

地元の城隍が迎えに来、三界の神明は女神を迎える。

祭壇を設けた家は爆竹を鳴らし、極楽世界の仏の弟子は祭壇を降りて来る。

(そこで芸人が『陳十四夫人伝』を語って、祭壇を設けた家の名前を知らせると、香を点じて黙って聞く。)

(台詞) 林嫁は、「三番目のお嬢ちゃんはまだ声を出さない。金のくしを抜いて、玉の皿の中でちょっと動かしてみよう。」と言った。

三番目のお嬢ちゃんは声を出した。「おや」彼女は静けさが好きだから、靖お嬢ちゃんと名づけよう。

林嫁は名づけて、靖お嬢ちゃんという。

『南遊』では、一度だけこの名前を呼ぶが、これからお名前を言わない。

男の子が生れても、女の子が生れても、お香を点ずる。

林嫁はお香を金の炉に楯して、福が高く、寿命が長い。

老夫人は赤ちゃんを抱いて、災殃なく早く大きくなるように祈る。

翌日、黄宅の僕が来て、赤ちゃんが生れて三日祝いのために法師に願う。

(台詞) 「老法師はご在宅ですか。」「外は誰ですか。」「黄旦那様のご命令を奉じて、赤ちゃんが生れて三日祝いのために、老法師にお願い申す。」「おや、家でも赤ちゃんの三日お祝いをするはずだ。」「お父さん、わたしたち法師の家では忌みということはない。あなたは黄宅の三日祝いをしてから、家のお嬢ちゃんのためにお祝いをしては如何でしょうか。」と林嫁は言った。「お前の言うことはもっともだ。」

(歌う) 老法師は衣冠を整えて、黄宅の僕について立った。

途中で止まらずに城内に入り、黄宅は中門を大きく開いて迎える。

陳老法師はいくつかの庭を通り、黄旦那さんは迎えに出る。

(台詞) 「老法師、どうぞおかけなさい。」「ありがとう。」

黄宅は供え物を庁堂の前に並べておく。

(歌う) お香を点じ、ロウソクをつけて神のご庇護を祈り、黄宅には男の子が授けられた。

家の保護神に紙の馬一匹、黄文淹の福を祈るために三日祝いを行う。

(台詞) 三日祝いが終ると、「老法師、お礼の小包を差し上げよう。」と黄旦那さんは言った。

「ありがとう、実を言えば、家に昨夜の子の時刻に一人の娘が生れた。わたしは家に帰って三日祝いをやるはずだ。」「おお、お宅の兄法師のお娘ですか。」「違います。」「お宅の弟法師の娘さんですか。」「違います。」「あなたの娘さんですか。」「そうです。」「おめでとう、おめでとう。」「十三日の夜中が十四日になる。暦によれば、甲子の日、甲子の時刻で、春の水のようなめでたい生れの年月日で、立派な人の生れる月、立派な人の生れる時刻だ。」と黄旦那様は言った。

(歌う) 三という月日に生れた男の子が抜群になり、三か七という月日に生れた女の子が黄金のように貴い。

めでたい年月日に生れた赤ちゃんは、天下の大賢人になるに違いない。

(台詞) 「老法師、お宅のお嬢ちゃんは生れの年月日がよいから、大賢人がお宅に生れた。」「そうか、わたしは道教の者で、どんな大賢人が家に生まれようか。」「お宅にお嬢ちゃんが生れ、家に坊やが生れた。お宅のお嬢ちゃんは家の黄文淹と縁組をしては如何でしょうか。」「それはいいことだけど、家は道教の者で、貴い役人のお宅に釣合わないと思うね。」「縁組ということは情義だけが大切で、高低ということはかまわない。両方とも心から願うならいいじゃないか。」と黄旦那様は言う、と、「そうおっしゃるなら、家の娘をお宅の文淹の許嫁としよう。何を結納の贈物にしようか。」と老法師は答えた。

衣の裾を結納の贈物にして、鋏を出して裾を切ろうとする。「老法師、どうぞ、お先に。」「黄旦那様、どうぞ、お先に。」

おお、主人は自分の裾をお客に先に切らせるようにすすめると、老法師は手を伸ばして、黄旦那さんの裾を自分の方へひっぱった。ずいぶん上までひっぱってから一きれ切った。これで自分の帽子でも作れるようにと思って、彼はできるだけ大きく切りとった。

こんどは黄元中の番だ。彼は老法師の粗末な衣の裾をひっぱって、銅銭ほどの大きさに一きれ切った。そしてその切れに刺しゅうをつけてから彼に返すように、女中に言いつけた。

印として裾を切り取ってから、二人はさらに挨拶をする。「陳宅の婚戚さん、どうぞ。」「黄旦那さん、どうぞ。」

「おや、二人は姻戚の間柄で、どうして黄旦那さん、どうぞ、と言うのか。陳姻戚さんどうぞ。」「黄姻戚さんどうぞ。」

〔歌う〕 黄、陳の姻戚は互いに挨拶し、祝いのお酒を出して法師をもてなす。

祝賀宴が終ってから、陳老法師はお別れを告げる。

途中で止まらずに家に帰り、帰ってから部屋に入る。

〔台詞〕 「お父さん、お帰りなさい。家の三番目の嬢ちゃんのために三日祝いをしなさいね、」と林嫁は言うのと、「お前はこの娘に名前をつけて、文書にでも書けるように。」と老法師は言った。「お父さん、家は陳姓で、十三日の夜中、十四日にかけていた時刻に生まれたから、陳十四と名づけては如何でしょうか。」

〔歌う〕 家の保護神に紙の馬一匹、陳十四のために、福運に恵まれるように三日祝いをする。

老夫人は娘を抱き上げて、十四と呼びながら可愛がる。

夫上の星が俗世に降りて、災厄なく成長して行く。

陳宅のことはさておき、別のことを少し挿入してから、もとに戻ろう。

南洋の大海に水底洞があり、雌と雄の蛇はそこで五百年ほど妖怪の仕業をしてきた。

彼奴らは占いができ、いろいろなものに化けることもできる。

人間に化ければ人間にそっくり、鳥に化ければ鳥のように高く飛びあがることができる。

ある日、雌と雄の蛇の妖怪は、互いに話しあう。

〔台詞〕 「あなた」「お前」「わたしたちは南の大海でいつも蝦や蟹や魚などを食っててはおいしくない。生ぐさくていやだ。その上に湛の水に浸って困る。」「お前、晴れの日には俺たちの分がない。」「あなたはこの洞窟をよく守って、わたしは外へ訪ねてみるわ。もしどこか廃れた宮殿や廟があれば、わたしたちはそこへ行って、お香を受け、福をもたらそうね。」

(歌う) 蛇婆は一つもんどりうって洞窟を出てから、鳥に化けて空を飛ぶ。

この妖怪は指折数えて占い、方々の様子を占った。

占いで当たったのは、冤猪にある一つの県のこと。南江殿平侯殿祖師の住んでいるところである。

彼は法を教えるために南天に行き、留守番の土地神が廟の門を守っている。

その隣組の頭、祭りを捧げるべき多くの家は、仏をも神をも礼拝しない。

廟に収めるべき献納金がなくなり、供え品もなくなり、南江殿にお香と灯が絶えて、ひっそりしている。

蛇婆妖精は嬉しくなり、急いでからだの向きをかえて洞窟の中に帰る。

(台詞) 「あなた」「お帰り。廃れた宮殿や廟があったか。」「あるわよ」「どこか。」

(歌う) 浙国に一つの県があり、南江殿平水侯王殿の祖師がそこにいる。

彼は法を教えるために南天に行き、留守番の土地爺が廟の門を守っている。

その隣組の頭、祭りを捧げるべき多くの家は、仏をも神をも礼拝しない。

廟に納めるべき献納金がなくなり、供え品もなくなり、南江殿にお香と灯が絶えて、ひっそりしている。

蛇公はこの様子を聞くや、嬉しくなり、お香と灯を受け、福をもたらすために、南江へ行きたがる。

雌と雄の蛇は、もんどりをうって、洞窟を離れ、鳥に化け、翅を伸ばして南江へ行く。

驚かされた留守番の土地爺は、口を切って罵り出す。

この無類の妖怪、この不埒者め。この廟の中に飛び込んではいかん。

早く出でうせろ。仏さまの顔に免じて許してやるぞ。

二十三日、二十四日に出て行かないと、俺が不人情だと思ってくれるな。

口を切って、土地爺と呼び、わたしの言うことを聞いてくれ。

正面の壇にわたし夫婦に坐らせてくれば、この壇を守る土地爺も引立てられ、光栄になろう。

正面の壇にわたし夫婦に坐らせてくれないと、先ずお前土地爺をお菓子にしてやるぞ

壇を守る土地爺は仕方なく、この妖怪を廟内に迎える。

(台詞) 「あなた。」「お前、よく言いつけたか。」「よし、あなたは後ろの方に行って巣を作って、わたしは、おいしいものを出してくれるように、隣組の頭に夢知らせをしてくるよ。」

(歌う) 蛇公は後の方で巣を作り、蛇婆妖怪は廟の門を出る。

夜が静まって、三回目の時刻知らせが過ぎると、神を祭るべき家のベッドの前で夢知らせをする。

隣組の頭よ、目を醒ましてくれ、目を醒ましてこちらの言いつけをよく聞いてくれ。

わたしが誰かと聞いたら、わたしは南江殿の主神だ。

私は法を教えるために南山に行き、留守番の土地爺が廟の門を守っている。

隣組の頭や神を祭るべき多くの家は、仏を拝まず、神をも拝まない。

廟に納めるべき献納金がなくなり、祭りが絶え、南江殿の香や灯がつけられず、ひっそりしている。

法を教えた南天から帰って、留守番の土地爺が如実に上奏した。

前のように献納金を納め、祭りを快復し、再び南江殿のお香や灯をつけてくれ。

牛、羊、豚の頭や油で揚げた鷲鳥を供え、いろいろの皿をよく並べておけ。

招かれることはいらない。自ら祭りを受けるために降臨する。

隣組の頭よ、わたしの言うことに従えばすべての家を安寧に暮らさせる。

隣組の頭がわたしの言うことに従わないと、先に頭の人をお菓子にしてやるぞ。

方々へ夢知らせや言いつけをして、夜が明けるまで一晩夢知らせをした。

蛇婆が殿堂に帰って、驚かされた隣組の頭は目醒めてびくびくする。

(台詞) 「おや、あなた、立派な男なのに、こんなにぐっすり眠りながら、足で子どもを蹴ったりして、子どもが枕に抛られて泣いたわよ。」「おお、お前、俺は夢を見たのだ。」「夢って、眠いから夢が多い。めずらしいことじゃない。」「俺は殿主爺の夢を見た。」「殿主爺は地元の仏だが、何を言ったの。」

(歌う) 彼はこう言った。法を教えるために南天へ行ってから、留守番の土地爺が門を守ってきた。

隣組の頭や祭りを捧げるべき多くの家は、仏を拝まず、神をも拝まない。

廟に納めるべき献納金がなくなり、祭りも絶え、南江殿のお香や灯がつけられず、ひっそりしている。

法を教えた南天から帰って、留守番の土地爺が如実に上奏した。

前のように献納金を納め、祭りを快復し、再び南江殿のお香や灯をつけてくれ。

牛羊豚の頭や油で揚げた鶯鳥を供え、色々の皿をよく並べておけ。

招かれるには及ばない、自ら祭りを受けるために降臨する。

隣組の頭よ、わたしの言うことに従えば、すべての家を安かに暮させてやる。

隣組の頭よ、わたしの言うことに従わないと、先に頭の人をお菓子にしてやるぞ。

(台詞) 「おや、そうか。あなたたちのような頭の人には本当にだめだ。誰が仏さまに灯をつけて上げることがあるか。誰が仏殿の掃除をすることがあるか。用事があれば、仏の足を抱き、用がなければ、仏さまのことを全然気にしない。その仏さまは怒らないはずがないだろうね。夢知らせがあったから、明日皆さんを呼んで相談しよう、相談しようね。」

夫婦二人はそのように定めた。翌朝、皆南江殿に行って、自分が南江爺の夢を見たことを話し合う。ある人は南江爺がもう帰って来たという。あっちからも、こっちきからも、口をそろえて議論する。話の内容は、主に献納金のことだ。

「献納金、献納金と言えば、長く滞納したのは、長生花、灯牌の家、雄鶏花、破油台たちだ。君は彼らの献納金を催促するはずだ。君は俺の代わりに太平花、阿宝兄にこのことを伝えてくれ。」

「阿宝兄はどうしたの。」

「献納金を支払わなかっただろう。どうしたんだろうね。」

「ある日、俺は途中で阿宝のおくさんに逢った。彼女は埠頭で洗濯していた。洗濯をしているのね。と俺は話をかけた。」

「頭家爺、どこから来たのか。」「家から来た。阿宝兄さんは家にいるか。」

「彼は商売のため出かけて、まだ帰らない。」

「お願いするが、俺の言うことを伝えてくれ。南江殿の献納金がたくさん滞納された。昔の本には、人間が仏に頼り、仏も人間に頼るのだと言う。南江殿への献納金をすれば、お宅が幸福に恵まれ、全家族が無事で、商売がよくもうかると

いうように庇護されるだろう。俺がこういったと伝えてくれ。」

「献納金、献納金。仏はわたしに催促しない。君たちはひどくひもじくて肉を食いたいから、わたしに献納金を催促するんじゃないか。」と阿宝のおくさんは言った。

「阿宝姉さん、そう言うか。お宅の献納金の期限をゆるめてやるつもりだったが、そういう以上、皆を呼んで来て、君の皮を剥ぎ、筋をひっぱり出してやるぞ。阿宝姉さんはどうしようか。着物をちょっと巻き上げて、ぽんーと川に飛び込んで自殺させようか。俺を咎めるなら、後の家の阿三の親父は俺をかばって宥めるだろう。」

「言うだけむだ。」とある人は言う。「それは頭の人言い方だ。君も頭の人だから、君も催促できるだろう。」伯伯は言う。「俺は一つのやり方があるよ。」とある人は続けて言う。「君はどんなやり方があるのか。」

「そのうちに、めでたい日に、皆がそろっていると、一緒に仏さまを迎えに行く。献納金を出した家は仏を迎えるだけでいい、献納金を出してない家があれば、仏さまを彼の家に坐らせておく。彼がたえられるか、どうかを見ろ。」

「そんなら、神かごは。」「神かごと言えば、二月二日に迎えてから、やはり殿堂の中においてある。」

「鍵や札を彼の家から取ってくれ。」

「一組の豚の頭をきれいにし、双連紙二帖を買い、鶏一羽を買い、細い、赤い布きれ二つ持って来い。」

「細い、赤い布切れを持って来て、どうするのか。」「赤い物で身を纏う。」

「三番目の兄弟の家に、細い、赤い布切れがある。君は取りに行ってくれ。」

「神かごを担ぎ出して。」

「太鼓を敲いて仏さまをお招きする。」

仏さまを神かごに乗せなければならない。

ソロバンや帳簿を持って、一部の人は好人として、一部の人は悪人として、硬軟両祿の手段をあわせて用いればこそ、献納金の返却を要求することができる。

その日に、関係のある人や品物はそろった。お香を焚く亭、神を焚く炉、銀色の紙で作った紙幣や紙の馬を焼く銀拒、仏のかごなど、十六の品がよく並べられている。

総責任者、文武の判官、ドラを敲く者がすべてよく並んでいる。

「あの子。尺、印を手で捧げて。」

「末子の岩ちゃんにあの旗を背わせて。」

「わたしも子供だ、旗を背わせてくれ。」と嬉ちゃんは言う。

「そうか。尺、印を彼に捧げさせ、お前に旗を背わせよう。」

「考えてごらん、どこから出発して仏さまを迎えようか。」

「太平から出て、豊熟で回り、安平に入り、先に太平坊の阿宝姉さんの家に仏さまを迎えさせようね。」

「おや、どこの家が仏さまを迎えるか。」と阿宝姉さんは聞くと、「昨日、俺たち頭の人がひどくひもじくて、肉を食べたい。仏さまがあんたに催促しないのに、とあんたは言ったのね。今、仏さまをお宅へ迎える。あんたは献納金を返却すれば、仏さまが人間に頼り、人間も仏さまに頼るから、仏さまを扛いで行く。返却しないなら、あんたらの皮を剥き、眉毛を抜き取ってやるぞ。」

「家はいくら足りないか。」

「以前、十九年まで受取ったが、一両七錢三足りないのだ。」

「一両七錢三、君たちはわたしをばかにしているんだ。」

ちょうど質屋から一両七錢三の銀をもらった。「君たち頭の人にやって、ゆっくり噛んでくれ。」

「阿宝姉さん、献納金がまだ返却していないのに、皆の気嫌をそこなっている。」

「阿宝姉さん、あんたはその銀を全部出して、俺たちにゆっくり噛ませてくれ。」

人を遣わして、古い着物やシーツなどを質屋に送って、銀一両七錢三もらった。献納金を全部返却した。

よし、仏さまを迎えて回る。長生花、雄鶏花たちはすべて仏さまを迎えた。

(歌う) 東門から西の南まで仏さまを迎え、すべての路地や通りを回る。

五日間に日夜回って、きつく催促したあげく、三千両の銀を集めた。

(台詞) 献納金がけっこう多い。

仏のかごを担ぎ出し、仏をその座にすえるための費用より外、まだ三千両残っている。

殿主爺をその座にすえてから、頭の人たちは退出して行った。

「あなた、牛羊豚や鶏、鶯鳥がおいしいわね。」と蛇婆の妖は言う。

「新鮮なものはおいしい。よく食べた。腹の空いたときはとくにおいしい。」

「彼らは私たちをよく祀ったから、私たちも彼らに報いようね。村が平安で、どの家にもよいことをもたらし、蒔いた作物が豊作になるように庇護してやろう。」

（歌う） 霊のある蛇の妖怪は、その村を太平になるようにさせた。

この南江殿のことはさておき、後にさらに続けて語ろう。

話変わって陳宅のことを語ろう。老夫人は娘を抱いて可愛がる。

一歳、二歳の時、お母さんに抱かれ、三歳、四歳になると、自分で歩く。

五歳、六歳の時に、南北を辨え、七、八、九歳に学校に行く。

黄文淹は七歳になると、師に従って勉強し、公文書をも読む。

先生が始めから終わりまで教えると、黄文淹はその文章全部によく通じる。

文曲星（黄文淹を指す）は本を持って、聡明な坊ちゃんはいつもよく勉強する。

親戚、隣人や同族の者は来訪してお祝いを述べ、祝賀宴が終わってから客が帰る。

坊ちゃんは書斎に帰って勉強する。このことはさておき、後に続けて語ろう。

大賢人（陳十四を指す）はすでに七歳になり、林氏姉は針仕事を教える。

老法師は外の広間に坐り、外に大声で呼ぶ人がいる。

（台詞） 「老法師、ご在宅ですか。」「外に来たのは誰ですか。」「わたしは上村の者です。三日祝いのために老法師にお願い申す。」「来た。来た。」

この人が出て行くと、あの人がすぐやってきた。

「老法師ご在宅ですか。」「外に来たのは誰ですか。」「万年札を入れるために老法師にお願い申す。」「お入りなさい。お入りなさい。」

この人が出て行くと、あの人がすぐやってきた。

「老法師、ご在宅ですか。下村の者は工事を始めるためにお願いをする。」
「お入りなさい。お入りなさい。」

「三番目のお嬢ちゃん、家の仕事はずいぶん多いわね。この人が出て行くと、あの人がすぐやってきた。針仕事を教えるために静かなところが欲しいなあ。南雲楼の上が静かで、針仕事を教えるにはふさわしいようだ。」と林嫁は言う。

（歌う） 姉と妹の二人はよく相談すると、南雲楼に上がろうとする。

姉と妹の二人は立ち上がって、ゆっくり階段に近よった。

階段が全部朱色の漆で塗られ、卍字の手すりがすべて金色で描かれている。
一本、一本の垂木の先に鏡が嵌められ、太陽に照らされて、ぴかぴかする。
南雲楼の上に上がると、左右の対句が目に残る。

左の方が、雷の印が黄金の鍵で鎖され、右の方が、お経が尊ばれ、世の中が
和やかになる。

上に三教の祖師の供える台が置かれ、左右の対句が目に残る。

左の方が、三教の祖師が上座に坐り、右の方が、山川の五雷が霊壇を守る。
内壇祐聖に紙の馬三匹、女神に紙の馬一匹、聖姑娘々(陳十四)は祖師を拝む。
雷霆大士観音仏、左右の対句が目につく。

左の方が、西天の竹の葉が千年までも緑、右の方が、南海の蓮の花が至って
香しい。

内壇祐聖大士に紙の馬一匹、女神に紙の馬一匹、聖姑娘々は観音さまを拝む。
紫金炉の中で檀香を焚き、聖姑娘々は姉さんに聞く。

(台詞) 「お姉さん。」

(歌う) あの尊い方は何の神像か。早くその来歴を聞かせて下さい。

お嬢ちゃんがそれが何の神像かと聞くと、それはまさに家の祖公爺だ。

(台詞) 「お姉さん、それは明らかに神像だが、どうして祖公爺というのです
か。」「三番目のお嬢ちゃん、これは速山、茅山の祖師だ。家は祖師に頼って生
活し、すべての祖師の御蔭で暮らして来たから、家の祖公爺(祖先)と同じだ。」

(歌う) お姉さん、祖師の供える台の前のお香や灯をつけて下さい。わたしは
祖師を拝みたいから。

内壇大士に紙の馬三匹、女神に紙の馬一匹、十四聖母は祖師を拝む。

祖師よ、この信女の不屈きで、祖師の壇のお香や灯をつけられずに、ひっそ
りしている。

信女は七歳になり、祖師の壇のお香や灯をつけて上げる。

雷霆大士観音仏、左右の対句が目に残る。

左の方が、西天の竹の葉が千年までも緑、右の方が、南海の蓮の花が至って
香しい。

お姉さん、あの尊い方は何の神像か。早くその来歴を聞かせて下さい。

三番目のお嬢ちゃん、その尊い方は何の神像かと聞くと、それはちょうどお

妹さんのお婆さんと言ってもいい。

(台詞) 「お姉さん、それは明らかに神像であるのに。」「実を言えば、それは香山観音仏だ。お妹さんが生まれる前に、姑さんは昼でも夜でも南雲楼で読経していた。後にお妹さんが生まれて七歳になった。それでお婆さんと言ってもいいだろうね。」

(歌う) おお、お姉さん香山の前のお香や灯をつけて、わたしは観音さまを拝みたいから。

内壇大士に紙の馬三四、女神に紙の馬一匹、十四聖母は観音さまを拝む。

千回も聖を拝み、どこでお祈りしても霊験があきらかだ。

この信女の不屈きで、仏母さまにお香や灯を捧げずに、ひっそりさせている。

この信女は今七歳になり、供え物を捧げ、お香を点じ、二階で読経したい。

お姉さんは階下に降りて下さい、わたし南雲楼で読経したい。

一般六十歳ぐらいいなれば、修行するがこんなに若いのに、修行するとは何事か。

わたしが七歳になって修行するのは早い方ではなく、六十歳になって修行するのもおそい方でもない。

妹さんは意地を張って修行したいなら、階下に降りて舅姑に伺ってみよう。

舅姑目上が喜ぶなら、あんたは好きなように南雲楼で読経しなさい。

舅姑目上の方が喜ばないなら、南雲楼で読経してはいけない。

わたしの願うようにお姉さんは階下に降りて行けば、仏さまは庇護してくれらるだろう。

姉さんは階下に降りて行かないと、わたしを不人情だと思って下さいな。

聖母(陳十四夫人)よ。七歳で林姉さんに失礼なことを言ったので、後に因果応報があるだろう。

内壇大士に紙の馬一匹、女神に紙の馬一匹、林嫁は南雲楼から降りる。

舅姑に申し上げると、許され、南雲楼で読経することが任せられる。

内壇大士に紙の馬一匹、女神に紙の馬一匹、十四は南雲楼で読経する。

お経を読んだり、仏を拝んだりし、仏を拝んだりお経を読んだりする。

南雲楼の上のことはさておき、後にさらに続けて語ろう。

この『夫人伝』にさらに南江殿のことを語ろう。雌雄の大蛇は廟の中にいる。

(台詞) 「あなた。」「何だ。」「牛羊豚の肉がおいしいか。」「牛羊豚や鶏、鶯鳥がおいしいな。」「もっとおいしいものがあるよ。」「どんなもの。」「人間だ。」「人間って、どうして食べられるか。お前は食べたことがあるのか。」「わたしは食べたことがある。ある夏の土用の暑い日に、わたしは洞山の峰にいた。その榕樹の上で涼んでいたところ、強い南の風に吹かれて眠ってしまった。ところが、茶碗を担いだある人がチリンチリンとやかましい音を立てて、わたしを目醒めさせるや、彼は落ちたわたしにびっくりして気が遠くなった。わたしは彼を生かして、嗅いでみると、とてもいいにおいだから、つい彼を食べてしまった。」「そうか。人間、どこから手に入れることができるか。」「南江殿の隣組の頭にさせたらいいわよ。」「彼らは人間を捉えてお前に食わせることができるもんか。」「南江殿の隣組の頭が聞かないなら、わたしはいっそうあらさがしをしてやるぞ。年寄りなら、骨が固すぎ、子供なら、乳くさい。春と秋の二回の祭りに、供物として、男を左に、女を右に置くように命令しよう。あなたは後の巢を良く守って、わたしは隣組の頭の家に行って夢知らせをするよ。」

(歌う) 蛇公は後ろの方で巢を守り、蛇婆妖怪は南江殿を出る。

夜が静まって、三回目の時刻知らせが過ぎると、隣組の頭のベッドの前で夢知らせに来る。

隣組の頭よ。目を醒まして、目を醒まして、こちらの言うことを聞け。

わたしが誰かと聞いたら、わたしは南江殿の主神だ。

牛羊豚や鶯鳥の肉が食べあきたから、少年、少女が甘くておいしい。

老いた者なら、骨が固くてまずく、子供なら乳くさくて、においが悪い。